

俳句通信

特別作品25句 ● 青山 丈「仲冬抄」

エッセイ ● 「伝統と前衛・新興と」 筑紫磐井

好井由江100句「象の皺」

【短期集中連載①・新作30句】

木内恵子「朝の嶺々」

【精鋭作家20句】

原 雅子「日々」

● 作品 ●

後藤比奈夫・深見けん二・猪俣千代子・神蔵 器・
 鈴木鷹夫・斎藤夏風・鍵和田柚子・山本洋子・
 木附沢麦音・大串 章・鈴木貞雄・小川軽舟・
 小原琢葉・大木さつき・宮本径考・菊地一雄・
 船越淑子・名和未知男・大高霧海・檜 紀代・
 菅原関也・草深昌子・村上喜代子・名村早智子・

大竹多可志・井上康明・三村純也・

佐怒賀正美・小泉八重子・杉山昭風・

根橋宏次・高橋洋一・中村洋子・

平栗瑞枝・森 潮・武藤紀子・

中坪達哉・神野紗希ほか



● 好評エッセイ ●

先人に学ぶ俳句

「阿波野青敏(6)岸本高毅

新連載・俳句とともに

「冴返る」井上康明

戦後の俳人たち

「石川桂郎」松岡ひでたか

虚子の肖像「虚子の女」坊城俊樹

文学エッセイ——放浪のかたち「東北へ、唄とことばの旅」酒井佐忠

櫻都を求めて「秋櫻子と根柢」神田ひろみ

誓子の素粒子「誓子の選評① いけない眼鏡」品川鈴子



奥秩父の大氷柱

写真／長谷川新三

特別作品25句

仲冬抄

青山丈

日捲りのふらふらとする一の西
枯蓮に今日の一日足されけり
白鳥の啼き合ふころの夕日かな
浅草の明かりのポインセチアかな
綿虫と遇ふ浅はかな日でありぬ
あまりにも夜が早く来る龍の玉





先人に学ぶ

俳句

第6回

阿波野青畝(6)

——句集「紅葉の賀」における写生と滑稽

岸本尚毅

紅葉の賀わたしら火鉢あつても無くても

青畝

「わたしら」と「あつても無くても」という口吻は、かなり可笑しい。かつて私はこの句が好きではありませんでした。前書に「虚子先生文化勲章を受けられ初奈波のいて祝賀会」とあります。虚子先生をあがめたてまつるあまりの「わたしら火鉢あつても無くても」という口調が妙に卑下したようで、嫌みな感じがしたのです。しかしその後、この句は決して卑下したわけではなく、率直な心境をユーモラスに写生したものだということが次第にわかってきました。

さみだれのあまだればかり浮御堂

青畝

など、青畝は初期の段階から、描写的の確さと声調のよろしさを天成のもののように体得していました。第一句集「万両」において、青畝の俳句は早々と完成の域に達していました。その後の長い俳句生活において倦むことなく秀吟を生み続けた青畝にとって、「花は変」という世阿弥の言葉は無縁だったのでしょうか。そうではないと思います。

虚子が青年青畝に向かって客観写生の大切さを長文の手

紙で説いたことは、俳句史の一つの大切なエピソードですが、虚子の教えに従った青畝が「万両」によって到達した境地は一言でいうと「自在の写生」だったと思います。さらにその後の青畝の長い歩みは一体何だったのでしょうか。「万両」で青畝流の写生を極め尽くした青畝の句は、その後、写生と滑稽の一体化へ深化していきます。

団栗の蓍に落ちてくゞる音

鈴木花實

高野素十

などは徹底した客観写生句です。これらの作品は、もちろん素暗らしいけれども、このような行き方は、ともすれば無表情で、笑いのない作品になりがちです。その反面、俳句に「笑い」を取り戻そうとすると、子規以後の近代俳句が徹底的に払拭しようとした「月並」的な匂い、理屈っぽく笑いを呼び込む恐れがあります。「写生」を伴わない「滑稽」は、俳句にとって非常に危険な罠です。

では「写生」と「滑稽」は本当に両立し得るのでしょうか。答は然りです。もしかすると「滑稽」は「写生」から生まれるのかもしれませんが。「人生は、見ようによってはすべてが滑稽だ。人間は真面目になればなるほど滑稽だ」(虚

作品 16 句

末法下種

後藤比奈夫

母の目となりて卵を抱ける鶴
ただ広き鶴の峙の昼なりし
雪降れば雪に鶴唳雪止めば
フオントネーボーシヨレヌーボ百歳樹
愛のチョコならずノーベル賞メダル
山梔子の実に黄飯を思ひ出す
何かありさう編みかけの毛糸玉

ごとう・ひなお
大正6年(1917)4月23日・大阪府生
まれ 父夜半に師事 ホトトギス・玉
藻にも学ぶ 「漢詠」名誉主宰・俳人協
会・日本伝統俳句協会等顧問 句集に
「沙羅紅葉」「めんない千鳥」など





伝統と前衛・新興と

筑紫磐井

私は何を論じたのか

ウェブ俳句通信七一号では、「特集／岸本尚毅・坊城俊樹・星野高士——三人かく語りき」と題して、三人に私の評論集「伝統の探求〈題詠文学論〉」について語り合っていた。著者としては身に余る光栄であり、いずれも好意あふれる、愛情的な感想と受けとったのだが、虚子の直系及び虚子俳句に深い造詣を持つ人々であるだけに、座談会は一気に虚子を論じた発言につながったように思われる。もちろん、発言に的外れはなかったが、著者としては、この本の読者としてはアンチ虚子、前衛作家・無季俳句作家に向けて発言をしていたので、必ずしも私と対立する意見とならなかったのはちょっと惜しまれたのである。

「伝統の探求〈題詠文学論〉」の目的は、何故「伝統」が生まれたのか、俳句には何故季題・季語が必要なのかを虚子を無視・敵視している人たちに説明することにあった。

例えば、現代詩人は、俳句を、——とりわけ虚子の提唱した花鳥諷詠を文学以前の前近代的な論理と受け取っている。これを、私の引用した「芸術家にとっての原則とは、芸術家もまた人間であり、その人間たちのために芸術家は書くべきであるということなのだ」(レオンカヴァッロ)に対して、坊城氏の如く「虚子はこんなのを知る必要がないんですよ。……だから芸術じゃなくていいんだよ。」「『芸術家……』の言葉は西洋人、西洋芸術のための言葉でしょ。まず人間があつてどうのこうの、という世界には行こうとしていないんですよ。」と行ってだけいては、まずまず詩人から軽蔑を受けるだけではないかと危惧するのである。

実はそうではないのである。文学の発生史から見ても、(俳句的な)題詠文学が先にあり、現代詩人があがめる「文学」はせいぜい産業革命以降に姿を見せ始めた新品種に過ぎない。現代詩人の言う文学・芸術が「小さな文学・

好井由江100句

象の皺

冬隣る甘納豆を頬張れば
まっ白に布巾を晒す神の留守
角刈りにされているなり冬つつじ
初しぐれ見馴れすぎたる駅が見え
信号機「カッコー」と鳴く小春かな
風邪心地ぶらんこの揺れいつまでも
花八つ手大きな蛇が出で来たる
茶の花やぶつかり合って雨と雨
少年に髭神々は旅なかば

